

柿沼 唯 (作曲家) Yui Kakinuma

ヨハン・シュトラウスII世: 喜歌劇『こうもり』序曲

「ワルツ王」ヨハン・シュトラウスII世(1825-1899)のウィーン風オペレッタ(喜歌劇)の最高傑作『こうもり』は、舞踏会に集まる人々が繰り広げる喜劇の中に華やいだウィーン情緒があふれる魅力的な作品。「オペレッタの王様」とも呼ばれ、ウィーンでは特別な演目として扱われている。その序曲は、全曲のエッセンスを楽しめる曲としてしばしば演奏会でも取り上げられる人気曲。オペレッタの中のいろいろな曲がポプリ(接続曲)風に続々と登場し、ワルツやポルカのリズムが華やかでうきうきした気分を盛り上げる。途中、鐘が6回鳴るのは、第2幕の最後で舞踏会の終わりを告げる午前6時の鐘である。

ヨハン・シュトラウスII世: ポルカ・シュネル「浮気心」 op. 319

18世紀の初めごろ、ボヘミア地方で生まれたといわれる農民の踊り「ポルカ」は、ヨハン・シュトラウスI世によって初めてウィーンの舞踏会場に紹介され、次第に人気を集めていった。当初はゆっくりとしたテンポの「フランス風ポルカ」だけだったが、シュトラウスII世の時代になると「ポルカ・シュネル(速いポルカ)」も登場し、様々な性格のポルカが生み出されていく。この曲のタイトル“Leichtes Blut”は、「気楽な性分」「高鳴る心」、転じて「ウィーン子気質」を意味し、シュトラウスII世のウィーン人への愛がそのいたずらっぽい曲想に表れている。ギャロップに近い爽快感が魅力の一曲だ。

ヨハン・シュトラウスII世: 喜歌劇『ジプシー男爵』より“読み書きは苦手”

『こうもり』に次いで高い人気を誇るシュトラウスII世のオペレッタ『ジプシー男爵』は、ハンガリー風のエキゾチックな情緒あふれる作品。ハンガリーの作家ヨーカイ・モールの小説に基づき、シュトラウスII世には珍しく2年以上の歳月をかけて作曲された。自身の60歳の誕生日の前日にアン・デア・ウィーン劇場で行われた初演は大成功を収め、その後ウィーンで人気を博してゆく「ハンガリーもの」オペレッタの火付け役となった。

“読み書きは苦手”は第1幕で、豚王の異名をとる金持ちの豚飼いジュパンが歌う一曲。「ヤー、読み書きはワシの得意分野ではなかった。だから、子供の時からワシは豚一筋だ。ワシは詩人だった事は無い、くそいまましい!ワシの人生の目的は豚毛の処理とベーコンの加工さ」とポルカのリズムに乗せて歌う。

ヨハン・シュトラウスII世: ワルツ「ウィーンの森の物語」 op. 325

シュトラウスII世の代表作というにとどまらず、ウィンナ・ワルツの最高峰とも呼ばれる一曲。民族楽器ツィターが登場する序奏に始まり、4つのワルツがウィーンの自然に寄せる作曲者の熱い思いを歌い上げる。踊るためのワルツというより、演奏会用ワルツのジャンルに属する一曲で、複雑で規模の大きな構成がとられているが、ウィーンの舞踏場で発表されるや、たちまち大好評を博したという。

ヨハン・シュトラウスII世: 喜歌劇『こうもり』より“田舎娘を演じる時は”

オルロフスキー侯爵邸の夜会に、チャーミングな小間使いアデーレは女優に変装してまぎれ込んでいる。このアリアはそんなアデーレが自分の演技力を披露する一曲。「田舎娘に扮するときは、つんつるてんのスカートで可愛らしくはしゃぎまわるの、まるで森のリスのように!」。そして後半は、「女王様をやる時は、おごそかに現れる。そちら、こちらに会釈を賜り、そう、何という立派な姿!」とますます悦に入って歌い上げる。

カール・ミヒャエル・ツィーラー: ワルツ「いらっしゃいませ」 op. 518

ウィーン生まれの作曲家カール・ミヒャエル・ツィーラー(1843-1922)は、シュトラウスII世の良きライバルとして活躍し、600曲以上のワルツやポルカ、23のオペレッタを残した。この「いらっしゃいませ」は、新しいメロディーが次々と登場して踊る人々を飽きさせないワルツ。タイトルの「Hereinspaziert! (ヘラインシュバツィールト)」とは、ホイリゲ(居酒屋)などで使われるウィーンという言葉で、陽気なウィーン子のサービス精神が曲にも表れている。

ヨハン・シュトラウスII世: トリッチ・トラッチ・ポルカ op. 214

「べちゃくちゃ」という女性のおしゃべりをユーモラスに描いたポルカ・シュネル(速いポルカ)で、軽快な曲調が運動会の定番曲としてもお馴染みの人気曲。ちなみにシュトラウスII世の妻が飼っていたブードルの名も「トリッチ・トラッチ」だったという。

**ヨハン・シュトラウスII世: 喜歌劇『ウィーン気質』より
二重唱 “これがなくちゃあ許せない”**

オーストリア大公女ギーゼラとバイエルン王子レオポルトの婚礼にあたって催された祝賀舞踏会のために作曲されたワルツ「ウィーン気質」は、初演当時から大成功を収めたため、シュトラウスII世は晩年、この曲を中心に既成曲をオムニバス形式に採り入れたオペレッタ『ウィーン気質』を計画した。シュトラウスの死により未完に終わったものの、友人の指揮者アドルフ・ミュラーII世により完成され、今日では『こうもり』や『ジプシー男爵』とならぶ人気曲となっている。今回演奏されるのはその第2幕、ウィーン会議の舞踏会場でロイス・シュライツ・グライツ国大使のツェドラウ伯爵と夫人のガブリエーレによって歌われる二重唱。第1幕(伯爵のウィーン別邸)での出来事を語る夫人と、嘘の言い訳をする伯爵。二人のやり取りはいつしかワルツ「ウィーン気質」の甘美でノスタルジックなメロディーとなる。

ヨハン・シュトラウスII世: ワルツ「春の声」op. 410

シュトラウスII世の180曲以上のワルツの中で、おそらく10本の指に入る人気曲であろう。今回のようにオーケストラ曲としても親しまれているが、もともとはコロラトゥーラ・ソプラノのための声楽ワルツとして作曲されたものだ。シュトラウスII世はブダペストを訪れた際、F.リストも同席したある晩餐会の席の余興に、即興でこのワルツを作ったと伝えられている。春の訪れの喜びを歌った曲だが、当時30歳年下の未亡人アデーレとの生活をスタートさせ、幸福の絶頂にあった58歳のシュトラウスII世の若々しい喜びが、そこには映し出されているかのようだ。

ヨハン・シュトラウスII世: ポルカ・シュネル「狩り」op. 373

シュトラウスII世は自作のオペレッタからメロディーを採った舞踏会用のワルツやポルカをいくつも作っているが、それは舞踏会で演奏することでオペレッタの宣伝効果をねらったものといわれている。この「狩り」では、「ウィーンのカリオストロ」というオペレッタの中の「おお、私の駿馬よ」という曲のメロディーを用いている。狩りのラッパを模したトランペットとホルンに、鞭や鉄砲まで加わる賑やかな一曲だ。

カール・ミレッカー: 喜歌劇『乞食学生』より
“肩に口づけしただけだった”

シュトラウスII世とともにウィンナ・オペレッタの黄金時代を築いたカール・ミレッカー(1842-1899)の代表作『乞食学生』は、ポーランドがザクセンに支配されていた時代の抵抗運動を題材にして、3組のカップルの恋の顛末を描く。政治犯が収容されている牢獄が舞台の第1幕、視察に現れた司政長官オレンドルフは伯爵夫人の娘ラウラに惚れているが、先日の夜、彼女に恥をかかされた事を苦々しく歌う。「私は英雄なのだぞ、誰からも尊敬される男だというのに！その私が一人の娘を得たいと思ったところが、この乱暴な仕打ち！だが今に見ている、この恥はきっと雪いでやるからな！私はただ彼女の肩にキスしただけだったのに、あろうことか扇でこのオレンドルフ大佐の顔をピシャッと叩くとは！これまでもいろいろな目に遭ってはきたが、ここまでひどい侮辱は初めてだ！」

ヨハン・シュトラウスII世: 皇帝円舞曲 op. 437

シュトラウスII世の三大ワルツの一つにも数えられる「皇帝円舞曲」は、まさに「皇帝」の名にふさわしい、堂々としたスケールの名作。1888年、シュトラウスII世64歳の年に作曲され、ベルリンで初演されたと伝えられるこの曲は当初「手に手を取って」というタイトルが付けられていたが、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフI世がドイツ帝国皇帝ウィルヘルムII世を表敬訪問した際に、両皇帝の友情の象徴として「皇帝円舞曲」と名付けられたという。行進曲風の導入部に始まり、高らかに歌い上げるワルツはいくつもの副主題へと展開して、豊かな表情と豪華な響きを生み出してゆく。

フランツ・レハール: 喜歌劇『ジュディッタ』より “熱き口づけ”

エメリッヒ・カールマンとともにウィンナ・オペレッタの「銀の時代」を築き上げた作曲家フランツ・レハール(1870-1948)の音楽は、親しみやすく、甘美で、何より魅惑的な歌にあふれている。そんなレハール最後のオペレッタ『ジュディッタ』は、情熱的な人妻ジュディッタが若い将校を追って北アフリカへ行き、ナイトクラブの人気歌手になるというストーリー。ナイトクラブに集まる男達を挑発して歌うのがこの歌だ。「私にも分からない、人がなぜすぐに愛を語るのか。でも皆が私の歌に耳を傾けると、その訳が分かる」「私の唇は熱い口づけ、私の手足はたおやかで白い。私は酔ったように踊る、なぜなら、私の口づけは熱い口づけだと知っているから」。

フランツ・レハール: 喜歌劇『メリー・ウイドウ』より “唇は語らずとも”

レハールならではの甘美で魅惑的な歌にあふれた、オペレッタ史上不滅の名作『メリー・ウイドウ』。このオペレッタのテーマ音楽ともいえるのが、メリー・ウイドウ・ワルツの名で呼ばれるこの曲だ。裕福な未亡人ハンナの元恋人ダニロが、ついにハンナに求婚する場面で歌われる二重唱。「唇は語らずとも、ヴァイオリンが囁く、僕を愛して、と！」とダニロが歌い出せば、「ワルツを踊れば、心も躍る、小さな胸ははずみ、ときめきは激しく脈打つ」と甘く切ないメロディーでハンナが応え、二人の気持ちは次第に高まってゆく。

ヨハン・シュトラウスII世: ワルツ「美しく青きドナウ」op. 314

この曲はもともと、当時プロイセンとの戦いに敗れて暗く沈んでいたオーストリア国民を元気づけようと、カーニバルの開幕に催されたウィーン男声合唱協会の演奏会のために1867年に作曲された。ハンガリー生まれの詩人カール・ベックによるドナウ川とドナウの乙女に寄せる詩に作曲したこの作品は、シュトラウスII世初の声楽曲でもあり、初演のときの評判はさほどではなかったというが、同年のパリ万国博で演奏して以来、「我が家のオウムでさえ口ずさむ」ほどの爆発的ヒットとなったという。今日でも、オーストリアの非公式な第2国歌と呼ばれるほどの人気曲であるのは言うまでもない。ウィーン・フィルのニューイヤー・コンサートでアンコールの定番となっているのはご存知のとおりだ。